



日本財団助成事業

特別なスタンスとスキルを持つ介助者の
実態把握とネットワーク構築実施報告書

特定非営利活動法人 境を越えて

目次

I. はじめに	2
II. 活動報告	
1. 会議録	
第1回会議	3
第2回会議	3
第3回会議	5
第4回会議	5
第5回会議	8
2. 撮影	
第1回	11
第2回	11
第3回	12
第4回	12
第5回	12
第6回	13
3. 活動報告会	13
－別紙資料（フライヤー）	
4. 調査報告	
聞き取り調査概要	15
調査報告内容	15
III. まとめ	

I. はじめに

本報告は、重度障害者への専門的ケアの体系化と育成方法の確立の中で予定していた①“地域で暮らす重度身体障がい者を支える介助の視点報告会と報告集の作成②地域で暮らす重度身体障がい者に関わる介助者が抱える不安調査内容についてまとめたものである。①については、これまで2年間で実施した特別なスタンスとスキルを持つ介助者の実態把握を基にし、広く一般に特別なスタンスとスキルを知ってもらうための動画作成に変更、動画発表会と同時に活動報告会（3月18日）を実施した。②は、実際の現場で働く介助者を対象とした個別調査に変更して実施した。本報告は、来年度実施予定の「重度障がい者への専門的ケアができる介助者育成方法の確立」につながるものとなった。

II. 活動報告

1. 会議録

第1回会議

① 概要

日付：2022年8月26日

方法：zoom

参加者：山田康子、彦田友香、飯田真弓、川崎彩恵、清水仁美、永山弥生、三浦遥、江口健司、今田ゆかり、吉村まき、石島健太郎、岡部宏生、本間里美、櫻井こずえ

② 内容要旨

・聞き取り調査の報告

③ 詳細内容

・石島が行った調査の報告「ALS患者の易怒性と介助」
・報告を受けての意見交換

第2回会議

① 概要

日付：2022年9月23日

方法：zoom

参加者：彦田友香、清水仁美、島田成美、櫻井こずえ

② 内容要旨

・撮影内容のポイント

③ 詳細内容

【出演】山田康子さん、清水仁美さん、当事者Aさん

【内容案】

①重度訪問介護ヘルパーってどんな仕事？～ALS当事者Aさんの介助者を例に～
→テロップでの説明くらいでいいのでは？

②Aさんの介助者○さんと△さんの関わり方～同じところと違うところ、みんな違ってみんないい。Aさんはどう思っている？～

③介助者の想いや意図を知る～どんなことを考えながら介助しているの？～

【撮影】

・定点カメラで介助の様子を記録
・密着カメラで介助者の動きを記録
・インタビュー（介助者へは後日）

【当日のインタビュー】

■介助者へ

・「どういうことに気を付けてこのケアをやっていますか？」
・「当事者さんによって向き合い方は異なりますか？」

…その家ごとに求められていることが異なるため、それを嗅ぎ取れる力が必要。

■当事者へ

- ・「介助者〇さんの時間でどういうときに安心しますか？」
- ・「介助者〇さんのケアの特徴ってどんなところですか？」
- ・「介助者が入るようになってご自身の生活などは変化はありましたか？」

…他人が家に入ってくることの抵抗感。それが強い人は在宅生活を希望していても難しいのでは。

・制度があつて、介助者がいたとしても、在宅生活が難しくなってしまうことがあることもあると思いますが、実際に在宅生活を成り立たせている A さんはどう思いますか？

- ・続かない介助者はどういう人ですか？
- ・A さんのチームの連携はどのようにやられていますか？
- ・介助者の育成はどのようにやられていますか？
- ・ストレス発散方法はありますか？
- ・自分の意志を尊重してもらえていると感じるときは？また、そう感じられないときは？

第 3 回会議

① 概要

日 付：2023 年 1 月 11 日

方 法：zoom

参加者：彦田友香、清水仁美、宍戸大裕、櫻井こずえ

② 内容要旨

- ・編集後動画への意見交換
- ・報告会の方法と内容について

③ 詳細内容

■動画に関する意見

- ・介助の魅力が見える印象。それが当事者の言葉としても出ているのが嬉しい。
- ・自己紹介のような…重度訪問介護ヘルパーってこんな感じだよ、っていうより、こうであれっという感じ。
- ・介護保険ヘルパーの経験がある方に「大変じゃない？」って言われたときに見せたい動画
- ・個性が出た。同じ当事者に違うヘルパーが入っていて。入江さんもそれをわかっているから、うまく使いこなしてもらってる感じ。
- ・いろんな人が見たい。
- ・当事者の情報が入っているのが見やすい。

■動画作成案

- うちのヘルパー紹介します
- この人のこんなところが素敵！シリーズ
- こんなことしちゃってませんか？シリーズ

■報告会案

対象：現在、重度身体障がい者の介護に関わる方

内容：動画ではなく、仙人会全体の報告会がいいのではないか

前半) 仙人会の活動報告座談会…これまでの議事録を参考に、どんな語り合いをしてきたかを報告

↓ …なぜ動画作成に至ったかにつなげていく

後半) 動画発表…事前に見てもらえるのか、一緒に見るのか

【参考：2020年度 2021年度で話してきた内容】

第1回 ・愛称である「仙人ヘルパーの会」とは・仙人ヘルパーへの必須質問事項の検討

第2回 ・仙人ヘルパーにはどういった人がなり得るのか・やめる人とやめない人がいる違いは何か

第3回 ・訪問介護を始めたきっかけ・共依存・サービス提供責任者や管理者としての立場や思い・ひとり立ちとは

第4回 ・コロナ対応（現場として、事業所として）と、利用者や介助者の様子・重度訪問介護の楽しさや辛さ、魅力ややりがい、課題

第5回 ・これからの仙人会のイメージの確認・仙人ヘルパーってどんな人？・仙人ヘルパーの葛藤・江口さんの講義資料を読む・Kさんのコミュニケーション方法・利用者と介助者の関係の一例

第6回 ・あなたが仕事をする上でもっとも大切にしていることは・エピソード（コミュニケーションが取りにくくなった当事者、鬱傾向にある当事者、天井だけを見て過ごす当事者、難病マンションで女王様のようになってしまった当事者）

第7回 ・SEIQoL-DWの結果共有と意見交換・アサーティブコミュニケーションについて

第8回 ・サンプル動画について・今年度の活動について・来年度の活動について・相談事項（連絡方法、他プロジェクトへの協力、個別相談への助言）

第4回会議

① 概要

日付：2023年1月27日

方法：zoom

参加者：山田康子、清水仁美、彦田友香、飯田真弓、川崎彩恵、三浦遙、江口健司、永山弥生、石島健太郎、岡部宏生、本間里美、櫻井こずえ

② 内容要旨

- ・学会報告
- ・動画の意見交換
- ・報告会について

③ 詳細内容

■学会報告

- ・症状であることとそうでないこと両方知っていることが大切（江口）
- ・冷静に話ができるときに聞いたうえで、この人の人間性がわかれば情動制止困難状況と異なる

るかわかるのではないか（江口）

・症状だから流した方がよいはよくないかなと思った。（飯田）

・プチストレス（当事者の方）ためこんでいると爆発する傾向はあるので、それは情動制止困難とは異なり、爆発することはあると思う。（飯田）

・患者さんはいろんなストレス抱えている人が多い。つもりつもって言っているだけなのか、情動制止困難なのかの線引きはすぐにわからないから。情動制止困難のことを伝えるのは大事だと思うけど。（飯田）

・症状と言われて安堵感、でる人はいると思うけどその患者さんの背景とか考えないといけない。その人を理解する気持ちが大事。（桜井）

・CAさんとは異なる介助の気持ち整理してもらって。共感になるな。（桜井）

・この人は病気という気持ちに収めたくない。介助者は。（川崎）

・第三者的な意識でみると同意する。（山田）

・情動制止困難のきついおぼちゃんの例（山田）

操さんが亡くなってからALSがみんな亡くなった。そのような状況の時に以下の表出があった。

「山田は文字盤とれなくて何人殺したの？」→病的な表現

「それ以外のみんなが言っているところ」→病的ではない爆発

状況を共有して、お互いにフォローをいれていく。介助者側の対応に活用。

・新しい人、慣れてないHPが悩んでいるときに情動制止困難の言葉は大切になってくるなど。（彦太）

・情動制止困難の怒りとそれ以外の怒りの違い。日頃から気になっていることからスタートして、その後の暴言になることはある？（彦田）

→あるよ。（山田）

・そのような場合、どのように共有していくのがよい？（彦田）

→私見を入れずに言われたことばをまずは、共有。感情をいれなくて言われたことを共有するとよいのかな。もやもやも吐き出しながらにもつながる。救われる部分にもなるのではないかな。

◇まとめ

・情動制止困難の説明は、受けての状況をみながら伝え方を考える必要がある

【理由】症状であることを知ることによって救われる人がいる反面、症状というひとくくりにすることで、本来みるべき当事者の方の状況や気持ちをないがしろにしてしまうと本末転倒であるため。

・情動制止困難とはその瞬間の前後の状況にかぎらず暴露する場合がある一方で、その瞬間の前の状況に引きずられて、とめられなくなり言う必要のないことまで言ってしまったりするよう場面もある。（岡部は後者の状況がよくわかる）

—対処法：まずは一人でかかえこまない。他の介助者に私見をいれずに言葉をリアルに伝え、その後自分の考えを伝えながら同様な状況かなかったか？など他の仲間の意見を皆で共有する場を作っていく。

■動画の意見交換

対象：現在、重度身体障がい者の介護に関わる方

目的：現場で抱える悩みに共感できるもの、また、解決の糸口になるものを作成する

第1弾目標：①熟達介助者のスキルとスタンスが見える動画を作成する

—働いている感じがみれるとよいな。

②当事者から見る熟達介助者のスキルとスタンスが見える動画を作成する

【感想】

・複数名の動画が必要ではないか??

—表面的な正解を目指すのではなく… (石島)

・自分のスキルと比較できて、まちがっていないなって思った。

—上質なケアをと高望みしていた時期があった。当事者の方と新人ヘルパーさんに教わることが多いなって。自分が今やっているケアしかわからないので他の仙人ヘルパーさんに入り込んでみたい。患者さんが得をすればよいなって思う! (三浦)

【意見1】 仙人会で話してきたスキルとスタンスが見える動画になったか?

・なったし、みやすかったよ。

・当事者の入江さんからの内容があって、見え方がわかりやすい。

・山田さんと清水さんの2つをみて、山田さんは無駄がない。清水さんのかかわりは、利用者さんがより求めることに対して、よりその人らしい生活にもってけるなって思った。

・山田さんのコメント「役割」を考える。短期的と長期的で考えているのではないか?? (江口)

—長期的と短期的な目標のとらえ方がよくわかる。(川崎)

—長期：娘に娘として接してほしい。母の時に思った。(川崎)

・入江さんが言っていた言葉。私をみているか?仕事をみているか?仕事であり技術であるがその人を知ることが大切だということ。集約されているな。山田さんと清水さんがあらわしている。(飯田)

【見せ方などのご意見】

・1人の当事者の方に2人の介助者だったが、一人の当事者の方にいろいろな生活の場面での見せ方もできるかも。

・あまりにも27年と16年ということで2人ともすごいという感じにうつりやすいのではないか?次元の違う方たちになっている感じも少しする。少し距離があるという感じにとらわれてしまうのではないか。(川崎)

—今の素材でどう表現しよう??

—短いヘルパーもいるので、そういう事業所のかかわりも見えていただく。

—ヘルパーMIXでの様子をとるのはどうか??仙人はどこに行ってもそうか?初めましての時にどういうふうに対応するか?

—ぶちこんでみました!という動画作成

【意見2】 悩みの解決に必要な動画になるために不足している点は?

・仙人の解釈で深まっている部分もあると思うので、より深くわかりやすくなるのでは?

・キャリア浅い人が見ると遠いのかな??

・失敗談エピソード入れていくのは?

- ・入江さんには0からはいっている。でもそれにこれまでの経験を活かしながらどうか。どうやって関係性をくみだてていって、自分の仕事をくみだてたかを語るの？
- ・観察力があるという共通点があるのではないかと？（江口）
 - しっかりやるのがよいわけではない。というはるかさんの言葉から感じた。
- ・学生に教えてるところをとればよいのでは？（飯田）

◇まとめ

1. 今年度は、入江さんバージョン動画を以下の2点追加作成して終了とする。
 VAR4：介助時間が短い人、学生などが入っていてそれを指導しているようなもの
 VAR5：介助経験はあるが、新しい当事者の方に入る0からのエピソードや失敗談について
2. 来年度は、「仙人、行ってみました（仮）」動画を作成
 仙人は他の新規の方にはいった瞬間に仙人なのか？を明確にできるような動画をとる。

■報告会について

対象：現在、重度身体障がい者の介護に関わる方

日時：2023年3月18日(土)午後@オンライン

内容：動画ではなく、仙人会全体の報告会がいいのではないかと

◇まとめ

- ・動画をみながら対談するような方向性にもっていくのが報告会という感じがするかと。
- ・5本の入江さんの動画から1~2本を参加者とともみ、それについて話をする。
 —動画の選別や具体的な委細については今後つめていく。

第5回会議

① 概要

日付：2023年2月24日

方法：zoom

参加者：山田康子、永山弥生、江口健司、飯田真弓、川崎彩恵、彦田友香、清水仁美、石島健太郎、岡部宏生、本間里美、櫻井こずえ

② 内容要旨

- ・note掲載内容の確認
- ・来年度の予定について
- ・意見交換会（調査部より）
- ・報告会の内容について

③ 詳細内容

■特別なスタンスとスキルを持つ介助者の実態把握とネットワーク構築プロジェクトの紹介のサイト完成【公式】note内容の確認—事務局

石島)あげた共通点がどこまで共通なのか、それらが満たせれば仙人なのか、個人的には気になる。ただ、広報物としてはよいと思う。

■来年度の予定について—事務局

3月：活動報告会、日本財団の助成報告書作成、調査前倒しで開始

定例会：年3回行いたい

第2弾動画作成：交換留学体験の様子を撮影

■意見交換会 在宅継続が維持できなくなる当事者チームとはどのような要因があると考え
るか

江口) 継続ができなくなるまで行ったことはないが、介助者が耐えられなくなってやめていく
なりつつある現場はあった。残った介助者でなんとか対応して継続できた。チームとなったとき
に、主軸となって、なぜこの方はこのような表現をするんだろう、と噛み砕いて説明できる人が
いるかどうか。それでも納得できない介助者もいるが、そういう存在がいるかどうかは大きいと
思う。

石島) 介助者にあたりがきつい？

江口) なんでわかってくれないんだ！と言葉がきつくなっていく。感情のコントロールができな
い、体がつらいときに、文字盤で長く説明するのがつらい。短い言葉に含まれているいろいろな
ものを説明してくれる人がいること。冷静になれば介助者もわかるが、感情的になってしまう
と。

清水) 一軒だけ破綻したお宅に行っていた。40後半か50歳くらいの息子が当事者で、高齢の母
が主介助者。介助者が定着しない。情動制止困難ではなく性格的なものかなと思っている。P C
のやり方とかの要求がマニアック。私はそれがわからなくて「教えてください」というと「そん
なこともわからないなんて馬鹿だな」と。文字盤の時間というのがある、2~3時間。「それは
つらい」というと「お前が悪い」と。介助者を人間として見てくれない感じ。気に入った子は大
事にしていて、他はやめた。私もメンタルをやられた。数年後に母が亡くなり、病院へ入ったと
のこと。

石島) これって典型的なもの。本人に理由があるもの。問題がチームにあること、に注目してい
く？

山田) 結局は支援体制が機能していないということ。利用者が大きな割合となるとしても、支援
者側が機能不全となる。ケアマネが探す辞めるの繰り返し。改善しようとするモチベーション
が削がれる。そこを掘り下げるのはどうか、という感じ。

石島) 自分の中で消化しきれてはいないが。清水さんの事例、本人に問題があるとして、そこを
改善しようとせず介助者をあてがうだけ。

山田) 本人と支援側、両方の視点が必要。例。ALS当事者男性。情動制止困難がすごく出てい
る。ケアマネはスーパーケアマネ。指摘を本人にはっきりと言う。何かあったら私に言って、と
ケアマネが介助者を守っていた。どうしたらストレスのある現場で続けられるかを見つめてい
た。ケアマネに問題点を集約し、事業所に一斉共有。穴が開かない現場になっている。進行がは
やくT L Sになってきている。

本間) 同じ難ありでも、ケアマネのアプローチの違いによって変わる。

川崎) 当事者でも家族でも介助者でも、中にいる人、主軸、キーパーソン。誰でもいいけどいる
かどうか大きいと思う。当事者がぐいぐい発信する人はそうすればいいが、母のように発信が
難しくなってくると、ケアマネやサ責が。+家族。外からのマネジメントが必要となってくる。
それを任せるのは難しいと思う。山田さんのような人ならいいけど、100人とか担当しているケ

アマネさんにそれを求められるか。

飯田) 主軸になる人。私を知る中では、家族が主軸になるチームはうまくいっていない。口うるさすぎる、介助者に任せたいけど任せられない。介助者間での連携に任せられない家族だとうまくいっていない、というケースを見たことがある。介助者が主軸となるケースはうまくいっているような印象。緊急的なことを家族には覚えてもらい、万が一のときには家族にも担ってもらいたいけど。本人が言えるのに、家族が本人の意思に反することを言ったり、本人の人格が見えてこない・打ち消してしまうような。本人と介助者の関係ががんばって築こうとするのに、家族によって打ち消されてしまう。本人の意思を汲み取って行動したいのに、家族に止められてしまう。

江口) お互いにストレス溜まる。家族も気になって溜まるし、介助者もずっと見られているとずっと緊張状態。いい方向にいかない。キーパーソンが家族の場合、いい方向に行く場合もあるが、このようなケースもあり得る。

石島) 現場の感覚的にはわかる。端的にいうと、キーパーソンがうまくやればうまくいく、ということになるのか？難ありな当事者はいるけど、うまく回せる人がいれば大丈夫です、と。それは実際にあるのだけど、せっかく調査するのであればもうひとこえいきたい。

山田) うまくいっているチームってキーパーソンがいない場合もある。本人の意思をいちばんに、と言いつつうまくいっていないところもある。本人の意思を尊重することが共有されているというテイで、一枚めくるとそうでない、というチーム。都合よく本人の意思が使われている。

石島) それは介助者を調査すればわかるのか？調査対象に悩む。

山田) 尊重することがわかっていて、日々のケアをしているが、それをさせてくれない横槍が入る。本人が手のひら返しをする場合もあるし、周りからの横槍の場合もある。「言われたとおりに懸命にやっても無駄なんだ」「じゃあいいや」となる。

石島) 自分を内省的にみれる人ならそういう語りができる可能性があるが。今の場合なら当事者に聞くのがいいのかな。

彦田) しんどいなと思っていた当事者。関係ないところを批判する方。「存在が気持ち悪い」「顔がきらい」。それを私が伝えないといけなくて。でも、清潔感のあるきちんと仕事する方。でも、実際はマナーがなっていない方だった。当事者のカンでわかっていたみたい。しかし、会社の都合でその方は来続けないといけなかった。当事者がもともと持っている、人を見る目。介助者に暴言があるかないかって関係あるのかな。自分が合う家、飯田さんが合う家、ってあると思う。人を見る目がない当事者のほうが、気づかずに受け入れられるのかなとも思う。

山田) 事業所で後輩を育てる立場で、人と接する方が多い皆さんだと思うが、人を見極める目、「この人癖あるな」「この人はいけるな」というのがなんとなく初見でわかってくる。人がいないからなんとか育ててみよう、と思うと失踪したり。最初の印象ってあまり外れない。在宅で人と生活している当事者って、命を人に預けないといけなくなるから、そこが鋭くなると思う。当事者が「いける」と思っても、家族が切ってしまう。心では感じていても、発信が下手だったりできなかったりする。家族が支援体制を盛り上げてくれるようにしてくれたらいいが、潰す方に力をいれてしまうケース。

本間) 山田洋平さん。奥様が結構あたりが強いが、仲いい夫婦。見た人は「ああいわれて可哀そ

う。本人の主体がない」と感じた。でも実際はそうでなくて、介助者も大切にされていて、自分の役割もわかっている。パフォーマンス的なところがある。パワーをいい方に使っているケースだと思う。

石島) 調査方法は前回同様。対象や内容は検討。

■ 報告会 (3月18日) にとりあげるテーマについて

山田) 境のイベントで、肯定的なコメントも多く成果だと思うが、「すごすぎて私にとっては夢の話」というコメントもある。うちらだっているいろいろな言われて苦労してるんだ、っていうのを話せたら。前回イベントで吉村さんが車でぬいぐるみに話して発散するっていうのが印象的。仙人会って言われているけど、仙人じゃなくて一ヘルパー。日々現場でたたかっている。「私の失敗談」というテーマで当事者が語ったイベントがあった。

- ・ 自己紹介
- ・ 失敗したこと
- ・ やっちゃったけどなんとかリカバリーした話
- ・ 行き詰ったときの解消法

川崎) 失敗談系は入れたほうがいい。特別な失敗ではなく、よくあるようなもの。共感もってもらうなら。

江口) 海老原さんに言われたこと。「いくらベテランの介助者でも最初からそうじゃないでしょ?」と。

清水) 私からみて、飯田さん彦田さんは完璧。

彦田) 失敗談は山ほどあるが、酒井さんちでは呼吸器関係のこと。それだと重すぎる? 25歳で酒井さんちに入って、お米のとぎ方から教わった。

山田) ポップから重いのにいきましょう。

飯田) 私も山ほど失敗しているけど思い出しておきます。

2. 撮影

1回目

① 概要

日付: 2022年9月28日

場所: 当事者宅

参加者: 入江恵美子、清水仁美、宍戸大裕、櫻井こずえ

② 内容要旨

- ・ 撮影

③ 詳細内容

- ・ 日常的な介助の様子撮影とインタビュー

2回目

① 概要

日 付：2022年10月1日

場 所：当事者宅

参加者：入江恵美子、山田康子、宍戸大裕、櫻井こずえ

② 内容要旨

・撮影

③ 詳細内容

・日常的な介助の様子の撮影とインタビュー

3回目

① 概要

日 付：2022年10月1日

場 所：当事者宅

参加者：山田康子、櫻井こずえ

② 内容要旨

・撮影

③ 詳細内容

・10/1に撮影しきれなかったインタビュー

4回目

① 概要

日 付：2023年2月17日

場 所：当事者宅

参加者：入江恵美子、澤畑優子、櫻井こずえ

② 内容要旨

・撮影

③ 詳細内容

・日常的な介助の様子の撮影とインタビュー

5回目

① 概要

日 付：2023年2月22日

場 所：当事者宅

参加者：入江恵美子、清水仁美、櫻井こずえ

② 内容要旨

・撮影

③ 詳細内容

・追加のインタビュー撮影

思決定をどのようにしているか？一人暮らしで、家族は離れて暮らしている。

・体調に関わるため、本人の意思に反した対応が必要に思える場合（本人は痛いから今すぐ薬を飲みたい。でも、先程飲んだばかりで、今飲めないし、さほど痛そうでなく見える）や、共感的に関わっているつもりだが、本人からはわかってくれない、と言われる場合、認知面の難しさがあがり、やりとりが成り立たない場合、こういった時の利用者さんとの関わり方をどのようにしているか？やりとりが難しく、本人が1番つらいだろうと思ってつつも、イライラして、喧嘩みたいになったり、精神的にも身体的にも負担がある。

・以上のような状態の支援体制をどのように作っているか？介助者のフォローをどうしているか？LINEグループで共有したりしているか？誰がどのように介助者や利用者に関わっているか？

Q4、利用者、ヘルパーに関わらず、関係性を構築していく上で何を一番大事にされておられますか？

Q5、小さな訪問介護事業所所属の非常勤で、直行直帰のため、日頃仕事のことを相談したり雑談したりする場がなく、同じようなしごとをしている他社の方の話をきいたこともないので、色々なご経験の参加者の話を聞かせていただくことを楽しみにしております。

介護福祉士会やホームヘルパー協会はホームページの内容や研修も高齢者介護メインで、医療的ケアに関して情報発信や研修をとった活動はなく、身体障害に関するケアを一時的にではなく継続して学べる場や相談できる場所がないものかと探し求めていました。境を越えてさんとの出会いはとても大きいですし、今後も介護職でも参加できるイベントには是非参加させていただきたいと思っておりますが、他にもご存知の方があれば情報提供お願いします。

■アーカイブ：YouTubeにて3/19～4/18 限定公開

■報告レポート：https://note.com/npo_sakaiwokoete/n/nb3e6d38c79d8（活動報告会）
https://note.com/npo_sakaiwokoete/n/n58e7dc9672f7（動画）

■アンケート（3/30時点 回答者10名）

「報告会の内容はいかがでしたか。」

→満足90%、ふつう10%、不満0%

「上記のように回答された理由を教えてください。」

・当事者の方やご家族の生の声、同じ仕事をする他社所属の方の生の声をこんなにじっくりお聞きできたのは訪問介護を始めてから初めてであった。心救われる想いになりながら視聴させていただいた。

・重度訪問介護ヘルパーをはじめもうすぐ2年になりますが、離職率が本当に高いです。（中略）私自身の悩みは、利用者さんの求めるケアが利用者さんの思うようにできず長時間かかっていることや、私にだけ色々なケアを求められ仲間のヘルパーさんと足並みそろえられていないことです。今回の報告会では、今悩んでいることへの答えがわかり頭の中がすっきりして希望がわいてきました。ひとりでかかえこまない、ケアではなくその人自身をみる。動画では空気が伝わり、信頼関係ができてお宅では実際どのようにコミュニケーションをとり、ケアされているのかが分かってとても参考になりました。

・介助者として長年発信しづらかったことについて言及されていた。

・常に抱えている「孤独」や「不安」が自分だけではないことに安心と癒しを得、このやっかいな感情により自分が壊れない術を身につけて大好きなこの仕事を続けていきたいと思えました。

「報告会の内容は実際に活かそうですか。」

→はい 100%、いいえ 0%、わからない 0%

「上記のように回答された理由を教えてください。」

・当家のヘルパーさん達にも見てもらい、今度のヘルパー会議で議題にさせてもらい、参考に取り入れられるところなどについて話し合いたいと思います。

・現場での情報は現場にある連絡ノートでしか分かりませんが、今回ご紹介頂いた「ナラティブブック秋田」なら、直行直帰の介護ヘルパーでも現場の様子を事前に知ることができたり、利用者さんの望む生活が分かりアプローチしやすくなると思いました。（※参加者より紹介くださったもの）

・命をつなぐ、適切なケアをする、事に余裕がないと、ご本人の気持ちを確認する事が後回しになってしまうこともしばしばです。改めて、ご本人と向き合う事が大事だと痛感しました。

4. 調査報告

聞き取り調査概要

① 日程：2022年5月～6月

② 方法：zoom7件/電話1件/対面1件

境を越えてからの調査協力依頼に応じていただいた介助者9名に対し、聞き取り調査を実施した。調査協力者は、ALSを中心として重度障害者の介助に仕事として関わった経験のある人とした。介助者全体の性別比を反映して、9人中女性が7人を占めたものの、年齢は20代から40代、経験年数は半年から20年以上、居住地は都市圏から郊外・非都市圏までと、その他の属性は多様性に富む。

聞き取り内容は日々の介助での経験を幅広く対象としたが、当団体および調査実施者(石島)の興味関心から、大きく以下の3点が中心的な話題となった。

- (1) 理想とする介助者像とそれを理想を考えるようになった過程、またこれを踏まえた上での自身の介助についての内省、
- (2) 情動静止困難を始めとしたALS患者の感情的・精神的な症状についての考え方と対処方法、そうした症状についての医学的知識の受容、
- (3) 介助を行う中での困難経験、他の事例でどのように対処しているのか知りたい点

1回の聞き取りは平均して1時間程度であった。聞き取りは協力者の同意の上で録音し、文字起こしをして分析に用いた。

調査報告内容

上記の3点それぞれについて、調査結果を報告する。

1) よい介助のあり方については、多様な表現が見られた。相手とのコミュニケーションの重視、教科書通りでない利用者に合わせた方法の習得、相手の人となりを知ることなど、重なる部分はありつ

つも力点はそれぞれに異なる。上記のミーティングでも、命を預かり次に繋ぐ覚悟や、まず自分自身の体調を気遣うこと、時間を守ることといった論点が提出されたように、なにがよい介助であるのかについて、一義的に定めることは難しい。それもそのはずで、そもそも介助は個別具体的な利用者に対して行われるものであり、そこで何が望ましいのかは必然的に千差万別である。にもかかわらず、「よい介助」というある種のアイデアを私たちが何人かの介助者の仕事ぶりに見出すとき、それをどのように考えればよいだろうか。以下試論的になるが、そのよさの内実をいったん問わないことにして、代わりによさが何に帰属されているのかを考えることがひとつの道であるように思われる。たとえば、今回の聞き取り調査では、訓練によってよい介助ができるようになったと語る人は、だからこそ後輩に対してあえて口出しはせず、失敗も含めてまずは経験させることの重要性を語っていた。一方、元々介助に向いた性格をしていたと語る人は、皆が同じ性格ではないことを踏まえて、その性格ゆえに自分がどうしたのかを他人にもわかるかたちで言語化して伝えようとしていた。このように、なぜよい介助ができるのかについての認識は、その人の教え方と連動しているのである。その点、この法人に集まっている介助者が、「自分が仙人なんて」と語ることは示唆的である。当人たちは、自身が優れた資質をもつことを謙遜含みではあるかもしれないが積極的に認めようとはしない。おそらく、自分たちにとっては当たり前に行っていることなので、取り立ててすごいことではないという感覚があるのだろう。そしてそのことは、当たり前に行っているはずのことができない介助者を前にして、なぜできないのかがわからない、どう指導したらよいのかわからない、という事態につながる可能性をもっている。この点をどう解きほぐしていくのかは今後の課題である。ひとつには、仙人が自分自身の非凡さを認めること、自分の何がすごいのかを自覚することがあるかもしれない。以下の第3点は、この課題にもつながっていく。

2) 情動静止困難をはじめとする ALS 患者の精神症状については、医学的知識がそのまま受け入れられているわけではないことがわかった。たしかに、症状として怒ってしまうことがあると知っていることは、患者を理解し許すことにつながる場合もある。一方で、目の前の怒りが症状なのか別の原因のあることなのかは区別することができないし、症状であると理解することは、その背後にある患者のニーズや、それを伝えようとしている患者の努力を切り捨て、患者を一面的に理解するものであると介助者にとって捉えられていた。介助という仕事本来の目標に悖ることがないようにするためにこそ、情動静止困難という言葉で患者の怒りを片付けられないのである。よって、ALS 患者の感情・精神面についての理解を広めることは重要だが、同時に怒りの背景に何があるのかを考えることの重要性も合わせて伝える必要がある。

3) 介助は特定の利用者と長時間・長期間に渡って関わる仕事であり、直接見聞きし接する利用者は少なからざるをえない。そのため、他の事例ではどうしているのかという疑問を様々な面で介助者は抱えていた。

- ・介助時間の延長：シフト時間の終わり際に、患者や家族から何かを頼まれた場合どうすればよいか。善意としてやりたい気持ちもあるが、自分がやってしまうことによって、他の介助者もやらねばならなくなるのはよくない。どのように線引きし、断るか。

- ・患者の怒りへの対処：患者から怒りをぶつけられる。言い方はかなり厳しいものがあるが、これが

ALS 患者に一般的なものなのか、その利用者がとくにきついのがわからない。

・子育てとの両立：子どもの体調が悪いとき、仕事とどう両立するか。必ずしもすべての介助者がパートナーや親族を頼れるわけではないし、事業所もピンチヒッターの介助者を常にスタンバイさせられるわけでもない。利用者に理解があればよいが、他の事例ではどうしているのか。

・客観的に接すること：客観的に接することが大事だと言われるが、長く接していると利用者や家族、介助者それぞれの気持ちがわかる。どうしたら客観的であるといえるか、そのためにどうすればよいか。

・コミュニケーションが限られる中での介助：利用者のなかでも、とくにコミュニケーション方法が限定されている人の場合、自分がやっている介助が正しいのかどうかの確信が持てない。こうした事例でどのようにコミュニケーションをとっているのか。技術的な方法はあるか、また長く関わる中でわかってくることはあるか。

本法人の取り組みは、これらを共有し介助者間でのピア・サポートを発達させるという点でも意義をもっているといえる。

Ⅲ. まとめ

当団体では、2019年度より特別なスタンスとスキルを持つ介助者の実態把握とネットワーク構築をプロジェクトの柱として実施してきた。その中で、2020年度より3年間にわたり実施してきた重度障害者への専門的ケアの体系化と育成方法の確立の中で今年度の活動は、特別なスタンスとスキルを持つ介助者ら自らが自分たちの考え方をアウトプットするという成果に結びついたと言える。

今年度は、同じ立場で働く介助者の方、また介助者と共に暮らす当事者の方に特別なスタンスとスキルを持つ介助者の考え方やかかわり方を理解してもらうことを主眼において取り組んだ。また、報告会を通し地域で暮らす重度訪問介護が必要な当事者を支える介助者らが一緒に働く仲間としてネットワークを構築していくためのスタートとした。特別なスタンスとスキルを持つ介助者の実態把握とネットワーク構築は、介助者が孤立せず、自らの専門性を大事にして働ける環境の一助につながっていくことを願って継続していく。